

Bluff Archives Monthly News

2019年3月

発行 NPO 法人横浜山手アーカイブス

「考古学の視点から見た山手」

去る2月22日、第13回山手芸術祭参加事業として「考古学の視点から見た山手」と題し、元（公財）横浜市ふるさと財団埋蔵文化財センター所長坂上克弘先生にお話しいただいた。その概略を紹介したい。

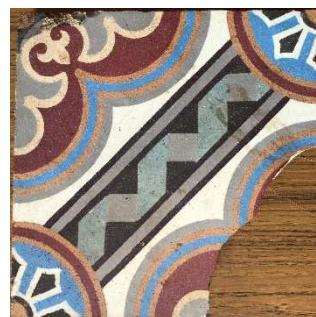
山手は、横浜の東側を占める下末吉台地が海に落ち込む位置にあり、北に入海だった低地に接し、西から東にかけて連なる標高40～50mの台地は、谷が複雑に入り込んで樹枝状に開析された狭い尾根状台地である。

埋蔵文化財とは、土中に埋まっている文化財で遺構、遺物を指す。山手には、いくつかの埋蔵文化財包蔵地がある。貝塚は2つあり、一つは元町貝塚（97番地、現アメリカ山公園）で、アメリカ山公園整備に伴い、発掘調査が行われ、縄文時代の斜面貝塚の他、近代の石敷き溝状遺構、切石積み竪穴状遺構が見つかった。もう一つは山手貝塚（元町1-77、元町公園）である。場所は異なるが昭和8年の『人類学雑誌 5-2』に山手貝塚調査概報として「貝塚は102番地住居から崖面に至るまで、貝殻散布は89番地セントジョセフ付近まで。遺物は貝類、鹿鳥魚の骨、土器など」と報告されている。山手を歩くと尾根道である山手本通りに沿って、緩やかなアップダウンがあるが、山手234番館あたりはひらけた台地になっている。おそらくそのあたりに縄文時代集落があり、その集落周辺に食料であった貝の捨て場（貝塚）があったのではないかと推測できる。今でもこの付近を歩くと表土上に貝殻が見つかることがある。アメリカ山公園もかつての入海際の崖地の上である。低地部分には、天沼（現北方小学校校庭付近）など、谷地には豊富な湧水があった。

2009年「横浜市の近代遺跡及び近代建造物の保護に関する要綱」が制定され、近代（年代としては概ね幕末から第二次世界大戦終結まで）が埋蔵文化財包蔵地とし

て扱われることとなった。山手では、山手80番館跡（エリスマン邸跡）、ジェラルド水屋敷地下貯水槽（元町公園プール付近）、アメリカ海軍病院跡（99番地、横浜地方気象台）、山手120番館遺跡（120番地）、フランス領事館邸跡（186番地、港の見える丘公園）、ビール醸造所地下貯水槽（諏訪町29、北方小学校）が埋蔵文化財包蔵地として地図に登録されている。

2018年秋には元町公園から、象嵌タイルが採集された。このタイルは、フランス製多色象嵌タイルで、フランスブルゴーニュ地方ソーヌ・エ・ロワール県、パレル・モニアルにあるポール・シャルノ製造所のものである。2005年に当地でのタイルの生産は中止されたが、その後でできたポール・シャルノ博物館の資料によれば、1891年から1921年までに生産品で、山手120番館遺跡でも同じタイルが見つかっている。当然、当時のフランスからの輸入品であると思われるが、今回の調査ではその時期や経路の判明までには至らなかった。現在横浜市内で、フランス製象嵌タイルが見つかっているのは、山手のこの2例だけである。（S）



元町公園採集のフランス製象嵌タイル

<参考文献>

『横浜都市発展記念館紀要 No.15』 横浜都市発展記念館 2019年
「横浜市行政地図情報提供システム」内「文化財ハマ Site」
「考古学の視点から見た山手」講演レジュメ 坂上克弘 2019年